



HUTAN (マレーシア語で「森」という意)

No. 5 1988・11・25

森と生活を考える会

郵便振替 大阪3-3880

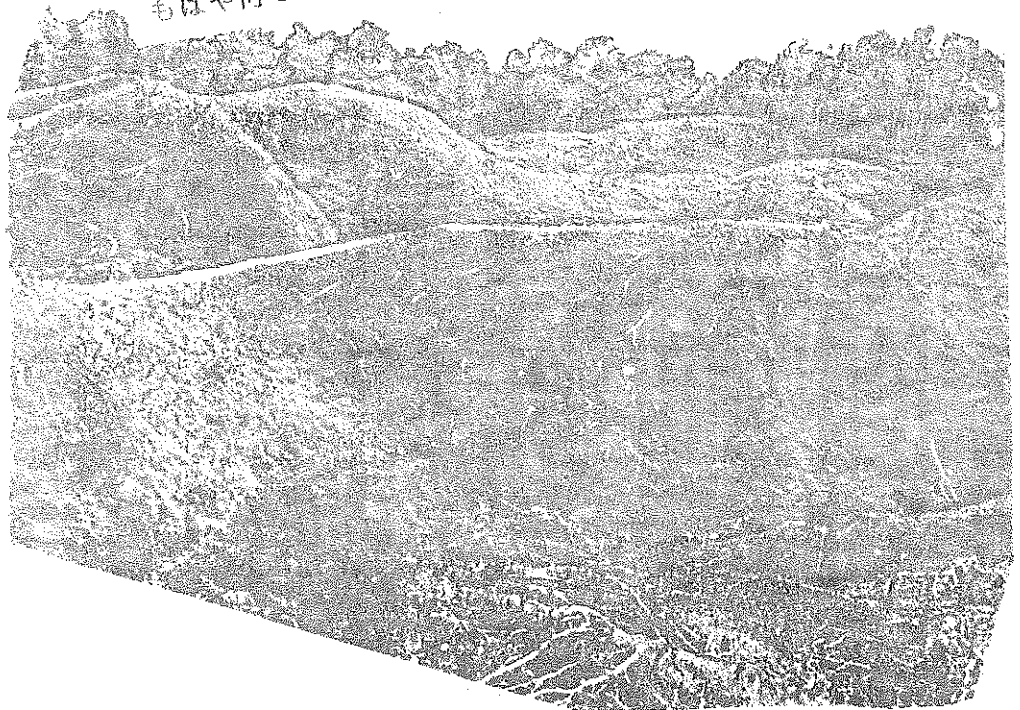
大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308

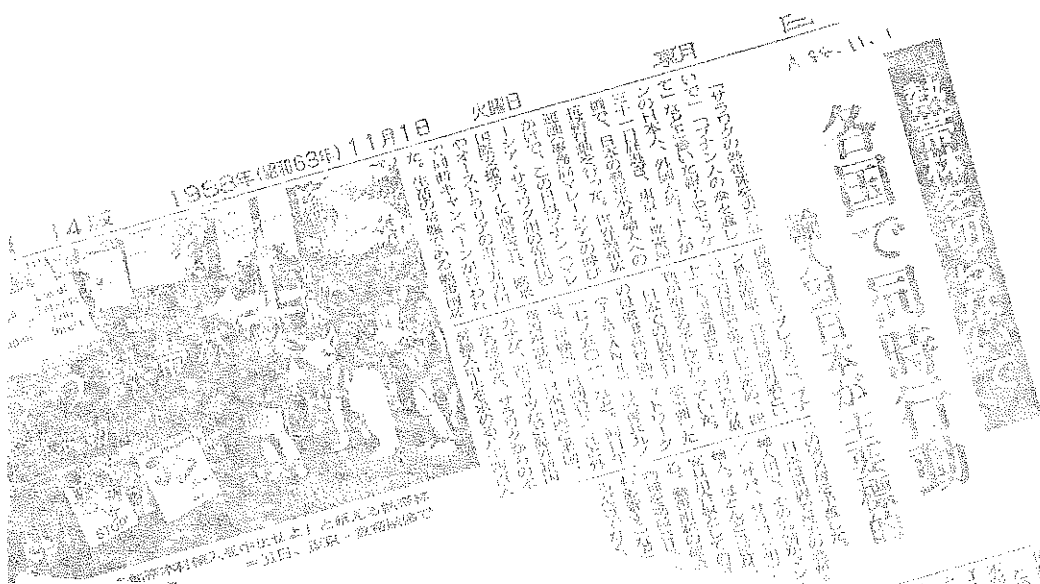
「自然を返せ! 関西市民連合」事務所気付 06-372-1561

定価

¥100

川が汚れ、伐採はまだ奥地へと続いている。
長老は、「ここは我々の祖父のまた祖父の地だ。
それがたった数年の伐採で、何世紀も生きてきた
森は消え失せようとしている。我々は、失うべきものが
もはや何もない。我々は死ぬまでこの地を封鎖するつもりだ。」





世界熱帯林運動事務局（マレーシア）の呼びかけで、この一〇月三十一日に世界の一五ヶ国で熱帯林伐採反対のキャンペーンが行われました。この日は昨年、ボルネオ島サラワクに住むプナン族など四二名が不当逮捕された日なのです。

「数千年にわたり、土壌を守り動物を育ててきた本々が、一瞬のうちに切り倒されていく。森は私たちの棲み家でもあるのです」と、彼等はサラワク州政府や伐採企業に訴えていましたが、それは全く受け入れられません。だから、先住民たちは七ヶ月間も伐採道路を封鎖したのです。

軍や警察によって逮捕されて以降、この三十一日の裁判は延期されたものの、州政府は道路封鎖を違法とする立法を決めたり、マスコミを統制したり、また先住民に定住を強要したりして、彼等の伝統的権利を取り上げようとしています。

現在、日本は世界の熱帯木材の五二%を輸入しており、輸入の九〇%以上はマレーシアから運ばれています。しかし、日本の伐採企業は「破壊は地元焼畑農民の責任だ、木材輸入は無関係」と言い、政府も森林破壊の実態に眼をつぶっていません。大問題です。

国際行動デーの一〇月三十一日、西独では日本やマレーシア大使館へのデモ、オーストラリアのシドニーでは多くの人が抗議の座り込み（二名逮捕）を日本領事館前で行い、東京では伐採企業に対して抗議のデモなどが行われました。

私たち「森と生活を考える会」も他団体といっしょに二度、マレーシアから来日した人を招き、催しを行いました。招いたマレーシアの人の発言は、熱帯林破壊、日本の侵略、そして私たちの生活と社会を問うものだと思います。

（文責・編集部）

文明が自然を滅ぼす

「熱帯林破壊と人権弾圧を問う」講演より



Mr. Mohideen (ペナン消費者協会)

みなさん、こんにちは。マレーシアからやって来たモヒディーンです。今日は人間の権利と環境問題について話したいと思います。

日本弁護士会の主催するシンポジウムに招かれてやってきたのですが、友人から皆さんたちの活動のことを聞いて、今日の集会に参加しました。

友人からはいろいろな話をするように依頼されたのですが、私は皆さんといっしょに考えたいので、私に対して多くの質問が出ればいっそう楽しい集会になると思います。そして今日は、私の知らないかったことを学んで帰りたいと思っています。一般的な説明から始めて、サラワ

クのスライドを見もらった後、討論も含めて私の問題提起にしたいと思います。

基本的な人権という言葉について考えてみたいと思います。あらゆる環境における文化的な権利、とりわけ先住民族と呼ばれる人たちの特殊な文化に対する配慮は、あまり考慮されていないと思います。われわれ文明人のいう言論の自由もその人たちのことも、平等に考えなければならぬのですが、状況はまったく逆で全然と言ってよい程に重要視されていません。

朝鮮やその他の国では、環境保護に対する権利という言葉が少しづつ注目を浴びていますが、それでも充分とはいき

きれないようです。環境保護の権利は重要なことなのです。

エコシステム(生態系)と言いますね、人間が自然の一部であるように、野生の草が自然の中で育って自然に枯れていくのを人間がつぶしてしまうのは、人間が人間を滅ぼしてしまうことになるのです。今日は二つの事例を挙げてみたいと思います。この話の中で環境を保護していく権利が、如何に重要であるかを理解してください。始めの例は、マレーシアのサラワクという地域に起こっている問題です。サラワクにはイバン族やカヤン族と呼ばれている先住民族がいます。その他インド人、チャイニーズが商業主義的な生活をして

います。面積を見るとサラワク州の八〇％は、いわゆる熱帯雨林だったので

豊かであった熱帯雨林の自然も今は三〇%を残すのみとなっています。熱帯雨林は人間にとって、否、自然の中でどれだけ価値のあるものかということとは、エコシステムが植物・動物・人間の共存によつてのみ生かされてくるということでも証明できると思います。

《サラワクの先住民はいま……》

サラワクには、数え切れないくらい多くの植物が群生していました。また動物もいっぱい生きていました。昆虫も勿論その例外ではなかったのです。しかし、一つの植物が伐採によつて滅びました。その植物しか食べなかつた昆虫は、たちどころに絶滅の運命を辿るしかほかはありませんね。この小さな例をとつても、自然の中で植物と昆虫がこまやかな関係でいるかが分かります。科学者は遺伝子の撈り場と呼びますが、昆虫や動物や植物だけではありません。人間もまたその例外ではなく、同じように自然のハーモ

ニーの中で生きて行かねばならない。

サラワクの先住民たちは、われわれ文明人の社会のようなタテのそれではなく、横につながるおらかな生活様式なのです。具体的な状況として、ロングハウスと呼ばれる長屋のような住居がありまして、それがその人たちの生きざまを象徴的に表しているようです。アダットとマレー語で言うのですが、その言葉が生活の規律になっています。

二つ目の特徴としましては、土地が彼等の間では誰の所有でも無いという事です。私たちは個人が土地を所有する事に馴れてしまっていますが、先住民の中では、土地を耕している間はその人たちにその権利があるとすることなのでして、耕作を終えてしまえばその権利は失くなくなってしまふという習慣になっています。

継続的にずっと定まった土地を所有するということは何いのです。

更にもうひとつだけ彼等の特徴を加えておきますと、先程言った農耕地の場所なんです。永続的にいつまでも同じ土

地を耕すのではなく、あらかじめ数か所の土地を区分しておいて、耕している土地が次第に肥沃の度合いが落ちてゆきますと、次の区分に移ります。そのようなことの繰り返しをしていると、何年か後に初めの場所へ帰ってきた時は、その土地が自然に豊かになっているという、自然を破壊しない穏やかな生活を続けているのです。

二毛作とか三毛作とか日本ではいいませんが、彼等は米が不向きなれば他の作物をすするという、その時々合った栽培をしています。

このような農耕の方法は、単に有効な土地の利用法だというだけではなく、人間にとって最も必要とする栄養をバランスよく取り入れるという、極めて合理的な生活の知恵であるといえます。

この人たちの営みは、自然の熱帯林を少しも侵すことが無かつたのです。彼等の農作物の収穫は意外に多くて、米の生

産は自給を上まわるくらいだし、魚も採れるなど、自給自足の暮らしは自然の恩恵をうけていました。豊かな暮らしをしていた人々であったのです。この民族たちの自然のハーモニーの中の静かな暮らしも、一九世紀になって外国人の侵入によって、次第に犯され始めるのです。

この人たちの文化を見ることにしましょう。手で作り出される工芸品には驚かすはじめてとして、目を見張るような美しいものが数えきれないほど有ります。音楽もすばらしいのです。先住民という言葉をも耳にすると、単に未開人という想像を文明人たちは考えますが、サラワクの人たちは優れた文化の伝統を持っていたのです。

《土地は誰のもの》

二〇世紀の今、彼等にとって一番の危機はまず土地所有の問題です。彼等の所有の感覚は先程お話ししたとおりですが、それが急速に崩れつつあるのです。

一九八〇年代のマレーシア政府は、土地所有に対する彼等の伝統的な考え方・伝統を認めようとせず、自分たちに都合の良い、彼等の存在を無視したような方策を始めかけています。政府は彼等の定住区、生活圏を勝手に決めて制限しました。国有地、国有林とは為政者にとって何と都合の良い言葉でしょう。しかしそれは、先住民族にすれば全ての伝統の破壊でしかないのですが……。

自然の中で自分たちの生活の知恵に従って、ゆったりとした区分を順番に耕していった、六つ程の耕作したところへ戻って来た時には、土壌の肥沃さが回復しているといった条件は、マレーシア政府に無理矢理押しつけられた狭い地域では望むべくもありません。自分の耕作地域を循環する期間が二〇年ぐらいだったのが、四、五年に縮められたのですから、彼等の困窮ぶりは想像できるものです。自給自足の生活が出来なくなつた人たちは、町へでて仕事を探さることになります。土地の所有について考えさせられてしま

う現象ではありませんか。

《プランテーション遠りの もたらす危機》

マレーシアの法律が変わって熱帯雨林の形態が変わった。伐採、破壊の跡は、政府の計画に従ってプランテーション作りが進められ、ゴム・カカオ・ヤシが栽培されています。

西部マレーシアではイギリスが二〇世紀にゴムを求めて侵出してきて、ただそのために熱帯林を根こそぎにして、ゴム・プランテーションを完成させました。マレーシアを植民地としていたイギリスですから、当然マレーシアが独立の日までそれは続いたのです。

マレーシアの国土は狭いのですが、それだからと言って熱帯雨林を切り開いてプランテーションづくりをして面積の狭さを補おうという政府の考えは変わりそうにありません。マレーシア政府のやり方は、土地の狭さや貧しさを回復するどころかそれ以前にも増して、住んでいる

人たちの生活は苦しくなっています。

もともとマレーシアは、工業先進国に原材料を輸出して収支を賄うのですが、このような状態では安い材料を売って、高い完成品を買わされる、ますますマレーシアは苦しくなるばかりです。このような状況が続く中で熱帯林に関係なかった都市の人たちも、そこに入ってゴム園を造り始めるのです。もちろん生活が苦しくなっていて、僅かでも現金収入が欲しいからなのですが、その必然として西部マレーシアでは熱帯雨林はその影をどめていません。

スノイヨ・サハラという部族たちは、大変な被害を被っています。同じような事がサラワク・サバ州でも起こっています。貧しくて食べられなくなってきた被害の未来はどうなるのでしょうか。

二〇年も前から加速的に拡まる伐採のスピードは、速くなる一方です。その最たる原因は「先進国」の需要が高まっているからなのです。また部族のボスたちの伐採によって、手っ取り早く現金収入

が得られるという誤った指示が受け入れられているのも見逃せない事実です。恐ろしいことが起こっています。マレーシアでは乱伐の当然の報いとして、今は木材加工品を輸入しているという現実なのです。

マレーシア財務省が発表したレポートによりますと、森林資源が伐採されている速度は予想を上回るもので苦慮しているのです。サバ州の八六%は森林なのですが、現在の伐採の進み具合に委せると暗たんたるものと言わねばなりません。それは伐採を推し進めてきた政府が慌てているのを見てもよく分かるのです。

ほかにダムが完成していく過程で被害にあうのは、熱帯雨林なのです。もちろん工事のためにというので、辺り構わず切り払われるのです。

もう一つの計画が中止になりました。政府の資金難もあったのですが、森を奪われて生活が出来なくなった先住民たちが立ち上がって、伐採、そして搬出の前に立ち塞がったのです。



熱帯林の存在が自然界に与える影響は、計り知れないものがあります。雨が降ると生い茂った大木の葉が、どんなに激しい雨でも適当にコントロールして洪水になるのを防ぎ、徐々に河川へ水分を流してゆきます。自然が作り上げたバランスも、伐採することによって目茶苦茶になってしまいます。空から落ちてくる大雨は、さえぎるものが無いからそのまま川へ流れて洪水を引き起こします。洪水を引き起こすだけではありません。洪水は、大量の土砂を押し流してしまふのですか



ら、土の中の植物が育つための大切な養分も失くなってしまふので、熱帯林伐採のあとは荒地となつてしまふのです。再び彼等が農耕のための鎌を手にすることも無いのです。世界中の熱帯雨林を伐採してしまえば、申し上げたような理由のために地球の氣候が変わると言われています。

これで熱帯雨林の乱伐採が、そこで暮らしている人たちだけでなく、地球全体に悪影響を及ぼすということがよく分つていただけだと思ひます。

マレーシアでは六〇万ガトンも収穫できた米も、今は一八万ガトンに減つてしまいました。また、マレーシアでは九才以下の幼児の八〇%が栄養失調で苦しんでいます。

森を奪われて都会に人口が流出するこ

とは前にも話しましたが、その人たちは都会でスラム化していることも付け加えなければなりません。ほど遠くない以前までは自給自足のコミュニティだったマレーシアも、今はこのような悲劇の国となつてしまいました。このような状況の中で、森の先住民たちは木材会社に訴え、政府にも訴え続けてきたのですが、それではどうにもならない事が分かつてくと、自分たちの手で立ち上がるよりほかはないと、決意を固めたのです。

彼等がやれること、それは切り倒した木材を運びだす道路を遮断してしまふ事だったのです。逮捕者が出ました。裁判も来年から始まります。それによつてかどうかは定かではありませんが、マレーシアでは今、自分たちのことは自分たちで守らなければいけないという優れた認識が芽生えてきました。

私がいまここで訴えたいことがあります。熱帯雨林を伐採し先住民の生活を破壊するという事は、工業先進国と発展途上国の不公平な関係であると言いたい

です。先進国の生活様式を問題にしなければなりません。アメリカ人のような派な生活を全て地球上の人が望んでゆくとすれば、世界中がそう遠くない時期に汚染が満ち溢れ、自然は滅びてしまふ。あえてその予測を更めて、ここに提起したい。熱帯林の伐採を中止して先住民の苦境を救うためには、先進国が途上国の経済搾取をやめる。とりも直さずということ。先進国の生活様式を改めることです。

《多国籍企業の原因》

一つの例として、多国籍企業を取りあげたいのです。途上国に工場を建てて住民の健康を破壊しています。マレーシア・イポ市のブキットメラでは、三菱化成が一九八二年に現地の企業と合併でアジア・レア・アース(ARE)社という企業を作り、住民の部落と百ヤードくらいしか距離がない所に工場を建てました。マレーシアはボリビアと並んで有数の錫の産出国なのですが、錫の精錬をした

後に、アマンという廃棄物が残るのですが、アマンからキドー元素というのが更に抽出されます。これは電子産業の中の花形である半導体の製造に欠かせない物なのです。その製造過程でトリウムという放射性物質が出てくるのですが、塵が大気中に浮遊するので、住民は当然のように健康を損なうてゆきます。この物質は将来ウランにも替るともいわれ、ラドンガスによる放射性汚染もあります。現地では次第にこの恐るべき事実が明らかになってきています。年間二千トンも放置されたままの廃棄物。

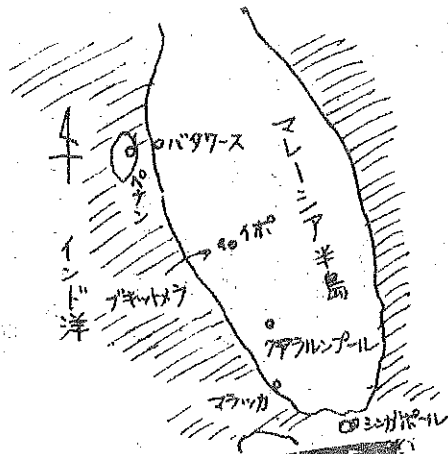
その証として、住民の血液の鉛の含有率が高まっています。妊婦の流産も著しく増えています。風邪をひきやすくなっています。住民の身体は蝕まれて免疫性が弱まっているからです。全ては放射性障害の極みである癌の過程なので、恐ろしいというほかはありません。住民たちは、まずこの惨状を裁判で争うことに決めました。世界中から科学者も現地に來て調査を始めました。日本か

らは埼玉大の市川教授、アメリカ、カナダからも専門家が来ています。日本の企業が、自分の国ではやれない事をマレーシアで平然とやっているのける。日本の環境保護運動を遣っている人たちも何とか力になって欲しいものです。

結論を申し上げますと、環境保護のため、マレーシアの現住民のために闘って下さるのなら、数多くのグループの人た

ちも、今は一つの力となるように団結して、是非このために力を借して欲しいのです。現代の闘いに国境はありません。最終的に政治が決めることではありませんが、その政治の決定に大きな影響を与えるよう、数多くの団体が一つの力になって闘って頂きたい。大きな刀になるための団結を望んでやみません。

(文責・はたやすのり)



ARE社に抗議する
パキットメラの人々

《シリーズ》生活から木林を考える③

私達が生活の中に求める木の暖かさを
美しさを？ほいったいどこからいっしょ。

最近よく、目にする“フロアリング”

という言葉がある。フロア（床）という単語から発し、床を張るという意味と
いうことらしいが、天然材の魅力復活
等とフロアリングが人気を得るようにな
った理由は、じゅうたん張りで問題にな
っていたダニの心配がない。掃除しやす
く、衛生的で、清潔感がある。また、
視覚的に“木”の特徴である木目が強く
印象づけられ、天然材のもつ素朴な質感
や暖かみのある雰囲気を感じられること
だそう。

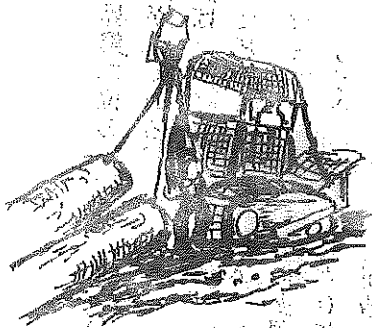
床材としては、ナラ、サクラ、広葉樹
が用いられてきたが、最近では、表面に
広葉樹を張った合板や合成樹脂加工した
合板が使用されている。

最近注目されはじめたといっても、

もともと日本では昔から床材は一般的に
用いられてきたもので、私自身、子供
のころ住んでいた家の台所や廊下は板張
だったと思う。

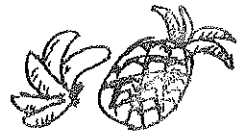
私達の感心事である、南洋材ももちろ
んその床材として戦前から使われていた
らしい、主として、アピトン材やラワン
材が使われ、1955年後半から、木
材供給不足のため急速に増加。196
5年には、400万㎡にもなったこと
があったそうだが、現在は、質的に
南洋材は、需要の高級化にともない落込
んでしまったらしい。

（鈴木千里）



木材の主要な輸入国であるわが国においては、
内需拡大策の実施などを背景に、87年の住宅着工
数が167万戸（同22.8%増）と、73年以来の高水準
に達したことなどから、87年の木材需要量は前年
比9.3%増の1億325万立方メートルに達した。

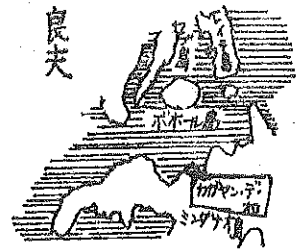
わが国の木材輸入については、85年秋以降の急
激な円高の進行により外材の価格競争力が強まった
ことなどから、87年の木材輸入量（丸太、製材、
合板、パルプ、チップなどを含む）は丸太換算
で前年比15.2%増の7,245万立方メートルと大き
く増加した。



奪われた大地・フィリピン (2)

（食べられないパイナップル）

西岡良夫



洋食皿の端にのせられたパイナップルの一かけら。日本のレストランや食堂で、友達や親子がパイナップルを食べるところをよく見かけるものだ。

僕が子どもの頃、パイナップルやバナナは金持ちを除いて「高嶺の花」だった。肉も卵もめったに食べられないけれど、夏には夏の、冬には冬の野菜や果物が豊富にあった。しかし今、トマト、キュウリなど四季を問わず、近くの八百屋やスーパーマーケットで安く手にすることができる。パイナップルやバナナも三百円ほど出せば食べられるし、バーゲンでパイン缶詰も買うことができる僕たちの食生活。

パイナップルやバナナが日本のある程度の人々の食べ物となったのは、日本が「経済成長」を行ってからだ。石油文明の開花と日本企業のアジア侵出が、衣食住の生活を変えてしまった。店頭にものが溢れて、知らずしらずのうち「豊かなことはいいことだ」という社会に慣れてしまった僕たち。

ミンダナオとビサヤ諸島を結ぶ交通の要所にあたるカガヤン・デ・オロ市。新興地だった町の人口が膨れあがって、現在市は二十万人を越している。僕が行くブキッドノン高原のデルモンテ農園は、街の中からタクシーで約三〇分。

この地に世界第二位の生産高を誇るパイナップルが広がっている。

日本へ運ばれてくるパイナップルは以前ハワイなどからだったが、人件費が高くなってデルモンテ社などの多国籍企業は、バナナと同様に一九六〇年頃に大農園を造った。大量生産が始まって、ここから多くのパイナップルが日本の食卓へと運ばれている。

眼下に川崎製鉄の煙突群を見て、タクシーは急坂をどんどん上る。バナナ園に続いてマンゴーの単一栽培地が見えてきた。運転手に聞くと、「ここからずっとデルモンテ農園だ」と言う。

カカオ、コーヒー、アボガドなどがたわわになった単一栽培地を次々と通り過ぎてから、袋をトラックに積み上げていた男たちを見て、僕は車を道路の端に止めてもらう。

「一日働いて五十ペソ（約三三〇円）かな。休日を除いてほとんど働いているが、食べるだけでやっとなよ」と、

トウモロコシを肩に担いだままの労働者。汗と塵にまみれた彼は、四〇kg位の袋を積み込んで、

「二〇世紀までブキッドノン高原では、俺たちマノボ族が陸稲、トウモロコシ、麻、タバコなどの食物を得るのに焼畑農業を行っていた。ほんの少しの森を拓き、小さな畑を作って、土地が瘦せ始めると次ぎの土地へ移って生活をしてきた、と親父から聞いた。移動式の生活だったから、今のような土地の登記もしなかったし、土地所有の概念も無かったのかもしれない。これ以上しゃべると俺たちが危なくなる」と、ピコと言った若者。

彼が指さした平原の向うには、刈り取り作業をしている人々が十数人いる。連作を続けてきた大地は瘦せてラテライト化して、赤茶色の肌が露わになっていた。急坂の下から続いてきた鉄条網は、道端が地平線のように見えなくなるまで農園を包んでいる。遙か遠く

には、枯木色をしたフォルテツシ牧場が山麓まで延びている。この先にまだ巨大な農園があるという。僕は興奮のあまり、何枚もの写真を撮りつづけた。行けども行けどもまだまだ広い農園。やっとパイン畑が見え始めた。パイン畑の奥にはマツチ箱のような粗末な家が見える。ピコや相棒が住んでいるところだ。彼等のような労働者と別に、

農園の中にゴルフ場、バンガロー、教会、郵便局などを備えたアメリカ人の住宅と、そこから一〇kmほど奥へ行った所に臨時雇いのスラムがあるという。そこに多くのマノボ族がくらしている。デルモンテのゲートまでやって来た

ので、僕はカメラを出して写真を撮り始める。すると、後ろから二台のバイクが轟音を轟き散らしてやって来た。タクシーへ横付けして、銃を構えたガードマンは「写真は撮るな。撮ったら没収だ」と命じる。

生活の一部だった森を壊され、畑を

次々と掠奪されてきた人々。先住民を銃で脅し、大地を奪ってきたデルモンテの姿は今も変わらない。掠奪した当初は一千紐だったのに、今はデルモンテが二万四千紐、フォルテツシが一万紐の土地をただ同然の値段で租借している。

暑さと疲れで喉が渴いた僕は急いで、生のパイナップルを探しに市場へと出かけた。だが生のパイナップルは無い。仕方なくパイヤを一づ買って喉を癒す。スーパ―へ寄ってやっと思つたパイナップル。それは一四ペソもする缶詰の中だった。

スーパ―の娘さんに聞けば、「パイナップルはデルモンテ農園からその工場へ直接運ばれる。フィリピンの人は家族を養うだけでせいっぱいよ、パイナップルなんて高くて買えないもの」と。買って来た一つの缶詰。安ホテルでは扇風機が呆然とうなっている。

「エビ」と日本人



雑感

何げなく生活していると気が付かないが、よく注意してみると私たちは輸入品に囲まれて暮らしている。木材はもとより食品、軽工業製品などはアジアからの輸入品が多い。しかし、輸入品の多くに比べて、第三世界のものを良く知っているとは言いにくい。アジアの生産者と日本の消費者の間には、はるかな距離がある。

代表的な輸入食品である「エビ」をとおして、日本とアジアの関係を考えよう。ト「エビ研」が結成された。その調査結果をもとに書かれたのが「エビと日本人」(村井吉敬著、岩波新書)である。

この本は「バナナと日本人」(鶴見良行著、同新書)の続編でもある。「バナナと日本人」では、日本に輸入されるバナナが、多国籍企業によるフリーピン農民支配のもとで生産されていることが明らかにされた。エビの場合、事情はもっと複雑である。

日本人のエビ消費量は、この三〇年間で急激に増加して今や世界一。その八七%が輸入エビで占められ、こちらも世界一。輸入エビの多くは、インド、台湾、インドネシアなど第三世界からやって来る。

エビの輸入には実に様々な人々が関わっている。エビを獲る漁民や生産する養殖業者。エビを集める買入人、パッカーと呼ばれる輸送業者。そして実際に冷凍加工する女工さん。冷凍パッカーにエビは、日本の商社や漁業会社の手で日本に輸入され、魚市場や問屋を経て店頭に並び、スーパーで売っている冷凍エビを見て、東南アジアの漁民の姿を思い浮かべるのはなかなか難しい。

トロール漁による水産資源の枯渇、養殖池開墾のためのマングローブ林破壊など、日本の大量のエビ輸入はいろんな矛盾をひき起している。また、大型やおいしいエビは輸入にまわされるので、現地の人々の口には入りにくくなっている。しかし、そうした問題は日本にいる私たちにはなかなか伝わってこない。

「エビを獲り加工する第三世界のひと々と、食べる私たちの間に長い複雑な道のりがあり、お互いの顔は全く見えない。資本のカネ」とテフノロジが私たちに第三世界を結びつけている。」

こうした状況はなにもエビに限らない。熱帯木材に関しても同じである。アジアの人々と顔の見える関係を築くためには、まず知ることが必要だ。そして、その上で行動を起こす。いつか「木材と日本人」をまとめてみたいと思う。

(塚森風太)

ズラズラい儲けの紙パ業界

(ひかわしずお)

「七社紙研紙、王子紙、十家紙は五割増益」といわれる各新聞紙。『紙の増産』が枯渇しつつあるのに、僅にだけ『なくなく』びそんなく儲かるの？と驚く。

紙パルプ業界は最近に於いて激変で、しかもこの激変があととされる。今年

の激変は、紙研紙が第一、紙パルプ業界は大変な儲けを儲けていく。特に『激変印刷』

用紙やコンピュータ、ファクシミリ、コピー向けの情報用紙の伸びが大きく、加えて円高による輸入材料が安いからである。

森林資源が少なくて豊かだった日本は、パルプ材供給の大部分を国内材にたよっていたが、需要の急増で今では原木の四割以上が輸入ものだ。

紙研紙を激変

政府が明らかにして、紙研紙の増産を奨励する。オランダの木材輸入税を減税する。日本など他の産地間に高関税を課する。輸入税を減税して、紙研紙の増産を奨励する。

木材に輸入課徴金を

英・蘭の貿易団体が提案

英蘭の貿易団体が、日本に輸入課徴金を課することを提案している。これは、日本が木材の輸入に課している課徴金を、英蘭の貿易団体が提案している。これは、日本が木材の輸入に課している課徴金を、英蘭の貿易団体が提案している。

「コピー紙でも何でもすくなく（ポイ捨て）られて、その一方で森が臨時のうちに壊されていく。針葉樹が主だけれど、最近増え続けているポスターなどを生産するために、熱帯のマンガロープ林がどんどん切り取られていると言つ。今後、現地生産も考えられ、製造工程で出る汚水が各園の海も汚して行くのではないだろうか。私たちが使った紙を文明を断ち切らねば、海を汚れた森はどんどん破壊されて行くのではないか。」

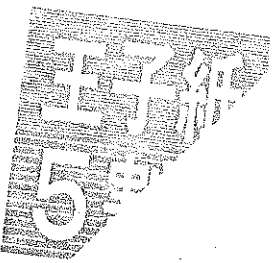
日経新聞 11月1日 (火曜日)

紙パルプ大手9社の

紙パ9社の89年9月期の通常利益の見直し

王子紙	88(9)	90(13)
本州紙	228(19)	456(41)
十家紙	52(18)	65(21)
大昭和	130(50)	230(21)
山王紙	70(3)	155(7)
大正紙	76(4)	170(2)
大正紙	64(3)	139(3)
三洋紙	77(14)	160(13)
神崎紙	43(11)	90(12)
紀州紙	32(13)	55(14)

(注)単位億円、カッコ内は前年同期比増減率、△はマイナス



署名、カンパありがどう

今後よろしく

七月末より行なってきた「マレーシア・サラワフ州の熱帯林と先住民の権利を守るための運動」は、十一月十二日現在、蘭西では約六百名強、カンパは約三万四千円余りです。全国で署名は昨年同様、約二万名が東京のJATAN(熱帯林行動ネットワーク)によせられていきます。

しかし、プノン族ら四二名も不当逮捕された先住民は、「金銭経済」を行っていない人が多数で、来年から始められる裁判費用もお金がありません。年末一時金なども与える人達は、少しでも構いませんから裁判費用としてカンパをお願ひします。

また署名用紙を手もとにおもちの方は、JATANもしくはHUTANの事務所へ、差込送ってください。カンパはマレーシアに送ります。(西岡)

編集後記

このなかでマレーシア訛りの英語ののかなあ、と思ひながら、モヒティーンさんの著書を読んでいました。テープ起しの作業に入ってから、ドッキリの連続だったのです。熱帯雨林を守れ！サラワフがピンチやノなんてもう手ぬるいのやないか。

あの土地の先住民の人たちは、シヤンゲルの中で、自分たちの暮らしのリズムを何千年も守り続けて自然を尊重することがあったのに、イギリスがマレーシア政府が、そして日本の経済侵略が、熱帯雨林を根こそぎ破壊してしまつて……。いま俺たちは被害の訴えにどう応えたら良いのか。(はた やすのり)

いつも動いてるごとのしんじつ。止まった時の自分以外の動きの激しさ。それを見て流されたいと思ひ、また流されまいと思つ。

また問題の現場の激しい動きは、また日本には伝へて来ない。それは私たちが表へ動くまいからねエ……。(ち)

この一ヶ月の間、絶望は、友人の着せかちのみ言葉を迎えて、サワフクへは、情を聞くことができませんでした。又々にはフナレい人達の名前を聞くことになり、フナレい人もあり、また、現地で直権問題に立ち向かう人達のエネルギーのよさも、心も、感じ、昔々、複雑な気持ちになります。(ち)

唯ははたと半年がたつてしまつた。ウータンは今後どうしていくのか。問題は山積みでたままです。来る12月20日、事務所でも冬合を行いたい。会費外の人も含めて来て下さい。時間は午後7時半より。それから、ウータンへの投稿もよろしく。(西岡)